ムードの形式と意味（3）
―取立て助詞について―

寺　村　秀　夫

1.　述語に先行するムードの形式

コトに対する話し手の主体的立場の表現として、前二稿では述語用言に後接する助動詞の類（ダロウ、ラシイ、ハズダ、ノダ等）をとりあげた。それらは、いずれも一つのまとまった叙述内容をまず描き上げてそれを聞き手の前に置き、次いで自分の見方、立場、態度を相手に示そうとするものであった。しかし、ムードというものは、話相手に対するそれも、コトに対するそれも、実際は発話の始めから、発話の全体を通じて在るものであって、文末に来るものに限るわけではない。渡辺実氏はこのことについて、「言語主体が文を述べはじめるその時から、文の内容づくりの叙述を進めている間も、そして文を述べ切るその時まで、陳述は、文を有機的統一体たらしめる力として、文を終始一貫して支えている」と述べている（『国語構文論』p.108）が、これは日本語だけのことではなく、普遍的なことと考えてよいと思われる。

ムードを担う構文要素類の、文頭、文中に顔を出す代表的なものとしては、感動詞や間投詞がある。これらは、文末の終助詞と同じく、話し相手に対する（「対人的」）ムードを表わすものである。それに対し、コト、つまり叙述内容に対する話し手の主観を文頭、文中で表わすものとして、従来、一般に「副助詞」と呼ばれてきたもの、および「係助詞」と呼ばれてきたものを考えることができるであろう。どういうものを副助詞、あるいは係助詞とするかについては、またこれらの呼び名と規定の仕方自体についても、文法家によってかなりの違いがあるようで、それについては次節で整理するが、ここでは話の糸口として次のような文における下線部分の役割を考えてみよう。

(1)　a.　10人<u>ダケ</u>来タ。

　　b.　10人<u>シカ</u>来ナカッタ。

　　c.　10人<u>モ</u>来タ。

上の文は、いずれも、事実として「10人（誰か）が来た」コトを表わしている点では変るところはない。違うのは、話し手のそのコトに対する見方である。(a) と (b) は、いずれも「10人以上来ると予想・期待していたが、その期待に反して」という含みを表わしており、(c) は、逆に「10人より（かなり）少ない数の人が来ることを予想していたのに、それに反して」という含みを表わしている。一般に「ダケ」の付く語が数量を表わす名詞であるときは、それを含む文は、それを除いた文の表わすコトに加えて、「それ以上……しない／しなかった」という含みを表わす。それが、「誤長ダケ」とか「月曜日ダケ」のように、数量を表わすものでないときは、「それ以外は……しない／しなかった」という含みを表わす。何が「それ以外」のものであるかは、多くの場合、そのときの外界の事情についての知識、社会通念に依存している。話し手の側からいえば、「何々ダケ……」「何々シカ……」と言った場合、自分の含みの中にある「何々以外」で何を指すかを、聞き手が了解するであろうという見込みのもとに言っているのがふつうである。「ダケ」と「シカ」は、「シカ」が述語の否定形を要求するということ以外に、構文機能の上でかなり大きな違いがあり、それ故それを副助詞としない考えが多いのであるが、それでも上の (1a) (1b) のように並行しているように見える場合の違いは、この種の助詞の意味特徴の記述を試みる上ではどうしても明確にしておく必要がある。両者の違いは、上のようにそれぞれの文を孤立したものとして並べている限り大して大きくないかのように見えるが、たとえば次のように、ある文脈の中に置いてみるとよく分かる。

(2) a. ×少シダケ日本語が分カリマスカラ、大ヘン不便デス。

b. 少シシカ日本語ガ分カリマセンカラ、大ヘン不便デス。

(2a) は、日本語を習い始めて間のない外国人からよく聞く表現であるが、これは日本語としておかしい。このことから、一般にその文を包む文脈、あるいは状況が、話し手から見て、予想・期待に反する（従って通常コトの否定の形で表わされる）ときには、「〜シカ……ナイ」の方を選ばなければならない、というふうに言えるだろう。ダケ、シカについては後にもまたとりあげる。

コトは、述語と補語（述語と特定の格関係にある名詞句）の結びつきによってつくり上げられる。補語の役割には重要度に差があり、コトが特定の現実の事象を描いているというために必須のものもあれば、補足的にただその事象をくわしく描くだけのものもある。それを描き上げようとするのはもちろん話し手の「主体的」行為である（だから時枝誠記は格助詞も‘辞’とする）には違

いないけれども、それはあくまでまず客体界を正確にそのまま相手に認識させようとする努力である。格助詞の働きはそこで発揮される。それに対し、いわゆる係助詞のハ、モ、コソや、先のダケやシカや、そのほかマデ、サエ、バカリといった種類の助詞の役割は、そのようなコトを描くに当って、あるいは描き上げつつ、それの付着する構文要素を際立たせ、そのことによって自分のコトに対する見方を相手に示そうとするところにある。「際立たせる」ということは、それを受けとる聞き手の心の中に喚び起される、何らかのほかのモノあるいはコトと「対比させる」ということにほかならない。「農学部ハアノ大学ガヨイ」という文の伝える情報は、「アノ大学ノ農学部ガヨイ」というコトについての情報と、「ホカノ学部ニツイテハ必ズシモソウハ言エズ、ソレゾレニヨイ大学ガアル」という話し手の気持についての情報を含んでいる。「対比」は、しばしば聞き手の、話の場、生活の場、あるいは社会通念についての知識次第で、「評価」につながる。そして、このような形による評価は、しばしば「意外さ」の強調である。「3時マデ待ッタ。」というときの「マデ」は、客体界の事象を映すだけの役割である（従って格助詞と考える）が、「16才ノ子ドモマデ兵隊ニトラレタ」では、戦争にとられる人間のあいだの順位づけが常識としてあり、その順位では最も下位のほうにある「16才ノ子ドモ」がとられた、ということで意外性を表わそうとしている。「16才ノ子ドモ」が、述語「（兵隊ニ）トラレタ」に対してもつ格関係、すなわち事実関係における役割は、主格である。つまり、この文もまた、「16才ノ子ドモガ兵隊ニトラレタ」というコトについての情報と、戦争の際にまっ先に兵隊にとられる可能性の高いものから「16才ノ子ドモ」までの順位づけの中で、その可能性の最も低いグループの一つである「16才ノ子ドモ」まで兵隊にとられたのだという、社会通念による「当り前」のこととの対比を意図する話し手の気持についての情報を含んでいる。同様のことが、次の例文についてもいえるであろう。

(3)　第二の人生まで、親方日の丸か。

(4)　雇人たちさえ、私には眼もくれない。

(5)　こんな時によく冗談など云えるものだ。

(6)　左差しにばかりこだわったのが敗因だ。

2. 従来の説の概観

副詞はしばしば品詞分類のはきだめといわれるが、副助詞もまた助詞の下位分類のはきだめの観がある。げんに教科文法では、助詞を四類に分け、第一を格助詞、第二を接続助詞、第四を感動助詞（＝終助詞）とし、「残り」を第三、副助詞としている。助詞の中に多様なものを認め、それを仕分けしようとするとき、格、接続、感動（話相手に対する働きかけを表わすもの）は、それぞれ統語的特徴もそれと結びついた意味表示の質の違いも比較的明確で、どの助詞をどれと認定するかについても、あまり大きな違いはない。問題は上の三つのどの網にもかからないものが、助詞には違いないものの中にかなり多くあり、それらを何らかの統語的、あるいは意味的特徴でまとめるのが難しく、一つの特徴でまとめようとすると、これまでの分類の中に属していたものとか、従来他の語類とされているもの（たとえば接尾語とか形式名詞とか）までがその網にかかってきてしまう、というところにある。以下で簡単に従来の主だった見解をふり返り、そこで問題にされている助詞を包括し、他の三類と区別できるような定義と、それによってまとめられると思われる語彙の範囲を明らかにし、次節のそれらの統語的機能、意味表示機能の特質についての考察の準備としたい。

副助詞の名付け親である山田孝雄は、助詞全体を次のような規準で六種に分けた。

- 特定の関係を示すもの
  - 句成分に関するもの
    - 成分成立に関するもの……格助詞
    - 成分に付属して、ただその意義上の状態を示すもの……副助詞
  - 句そのものに関するもの
    - 句と句を接続するもの……接続助詞
    - 述素に関するもの……係助詞／終助詞
- 特定の関係を離れたるもの……間投助詞

この中で特に「係助詞」「副助詞」の二種を立て、それらと格助詞との違い、また二者相互の違いを承接のしかたと文構成上の機能の面から明らかにしたの

が画期的なこととされる。山田が国語で係助詞とするのは、ハ、モ、コソ、サエ、シカ、ホカの6語、副助詞としてあげるのは、マデ、ナド、グライ、ダケ、バカリ、キリ、ヤラ、カ、ホド、ヅツ、ノミの11である。

山田によると、格助詞というのは「体言又は用言の間の関係に係る態度資格」を示すものであるが、副助詞は、「態度資格の如何に関せず、唯其意義を化裁するのみ」だというのである。副助詞は、「体言＋格助詞」という結びつきの間にも入るし、その結びつきのあとにも付くが、先の場合は「体言の用言に対する意義を限定し」あとの場合は「体言の用言に対する態度を限定」する。一方、係助詞は、「用言の述素に干与して文全体の意義性質に影響するもの」として他の助詞と区別すべきものである、とする。係助詞と副助詞は、上に述べたように文構成上の機能で区別すべきものであるが、また、それらが相互に重なるときは必ず、副→係の順になること、係助詞は陳述副詞にも程度副詞にも付くが、副助詞は付かないこと、副助詞は「死ヌバカリダ」のように断定辞「ダ」によって承けられるが係助詞はそうでないこと、などの明らかな統語的な違いがあり、その面からも別種の助詞と考えねばならない、と説いた。山田のこの考えは、その後現代に至るまで最も長く広い影響をもつものといってよいだろう。

国研（1951）は、現代国語における助詞の実際の用例を蒐集し、分類したもので、現在も広く利用されているが、その分類は基本的には山田のそれに最も近い。実例を洩れなく統一的に説明する必要から、トハとかサエ、ダッテのような複合的なものも一体化したものとして扱っている。山田の先の語彙に付け加えられたのは次の助詞である。係助詞としたのは、山田の6語のほか、トハ、サエモ、スラ、デモ、ダッテ、ナリト、ッテ（「波浮の港って、こういうところなのよ」）、ッタラ（「どうしたんでしょうね、おとうさんったら」）、（ッ）テバ（「父さんてば、赤ん坊に言うみたいなこと、おっしゃるんだもの」）。副助詞として加えているのは、マデハ、マデモ、ナンテ、ナンゾ、ナンカ、ヤラ（「何のことやら分らない」）の6語である。

ここまでで副助詞としてあげられた助詞の多くは、体言や用言の連体形に後接し、それから格助詞が付くこともあれば、体言に格助詞が付いて（橋本「連用語」）からそれに後接することもある。橋本進吉（1934）は、この両用の見られるものを副助詞として残し、前者の用法しかないものを「準体助詞」として切りはなした。ノ、カラ（「〜してからが心配」「〜したからには……」）ホド、などであるが、ダケ、バカリは「摘めるだけ摘もう」「三寸ばかり出ている」

のようなときがそうで、連用語に付けて使われるときは副助詞と見る。

宮地裕（1952）は、単語としての助詞の下位分類よりも、これらの助詞がさまざまな構文的機能を託されて文中で相互に結びつく、その機能を分類し、互いの関係を明らかにすべきであると主張し、橋本の準体助詞のもつ機能、すなわち「上に体言又は連体形態を置き、これとともに、全体で体言的語句を構成する末尾の要素として働く」機能を「準体機能」、副助詞のように「上に連用語を置き、これに何らかの意味を添える」働きを「副機能」と呼び、これに「係り」の機能と「格」の機能さらにいわゆる「接尾語」をあわせ、文全体の中でそれらが、体言を下の用言、そして陳述に結びつけていくさまを連続したものとして捉える。体言的接辞的なものほど上（左）に来て、陳述にかかる係り的なものほど下〔用言に近く〕に来る。

北海道 あたり へ までは しょっちゅう……
体　準体　格　副　係

宮地論文は、単に接続の仕方、つまり統語的ふるまいだけを手掛かりにしたのでは捉えきれない副助詞の働きを、文構成全体の有機的な体系の中に位置づけ、そのことによってその複雑な接続の仕方や、同じ形態が多様に使われる事情を明らかにした、この方向の研究としては先駆的なものである。なおこれに補っていくべき点としては、格、副助詞の順序入替えの可能・不可能、可能な場合の意味の異同、バカリダ、ダケダのように、述語用言の後に来て文全体を何かと対比させる場合、および（ここには紹介する余裕がなかったが）副助詞、準体助詞の「限定」の内容についての考察、などがあげられよう。次節でその一部について若干の考えを述べる。

本稿は、副助詞、係助詞を構文機能と意味の結びつきとして捉えようとする点で宮地論文の後を追うものであるが、それを文の構成要素としてのムードの表現を（主として）述語に先立つ形で表わすものと考える点では時枝誠記（1950）に学ぶところが最も大きい。用語、分類の仕方、個々の用法の認定の仕方については、松下大三郎（1930）に最も共感をおぼえる。時枝は、「格」「接続」「感動」の三種の助詞に加えて「限定」の助詞という一種を立てた。格助詞が、事柄に関する話し手の認定のうち、事柄と事柄との関係の認定を表現するもので、通常論理的思考の表現であるのに対し、「限定」の助詞は、周囲の事情によって認定の仕方に相違が出てくる、その仕方を表わすもので、話し手の「期待、評価、満足」等が表現されるものだというのである。このような働きをする助詞として、ガ、ハ、（いずれも格助詞としての働きもある）、モ、デモ、ダ

ケ、バカリ、マデ、カ、ヤ、サエ、バカリ、グライ、シカ、ナリ、タリ、コソ、キリ、ヅツ、ホド、ダノ、ヤラ、ナド、マデ、をあげた。国研と山田の係助詞、副助詞を合せたものにすべて含まれる。

時枝が、係りと格を合せて「限定」に一本化したのは、松下大三郎（1930）の考えに近いといえるが、松下はそれを「提示助辞」として一括した上で、「題目」を表わすものと、「特提」を表わすものに小分けした。題目の助辞は、ハ（「分説」）とモ（「合説」）、特提の助辞は、コソ、サエ、スラ、マデ、デモ、ナド、ナンゾ、ナンカ、グライ、シカ、ダケ、バカリ、ナリト、ホカ、カ、ナリである。松下は、このほかに、「一年ばかりかかる」「一円づつ遣る」「歩きながら話す」などの下線の語を「他の語を戴いてその戴いた他語と共に一副詞を構成する」ものとして「副助辞」、「校長さん」「親たち」のように他語を戴いて共に名詞を形成するものを「名助辞」、一般に接頭語とされるものを「頭助辞」とした。接辞と副助詞の区別は時にむずかしいことは確かであるけれども、この後の二種は助詞の下位類とするのは適当でないし、「副助辞」というのは提示・特提の助辞に吸収させるのがよいと思う。

本稿は分類の仕方とそれぞれの性格づけについては上の松下（1930）にほぼ従う。が、用語としては、松下の「提示（の助辞）」のかわりに「取立て（の助詞）」を使いたい。

「取り立ての助詞」というのは、宮田幸一氏の命名による。宮田氏には、宮田（1948）という独創的な著書があるが、最近も、宮田（1980）で、格助詞と取り立て助詞についての考えを解説しておられる。そこで例としてあげられている助詞は、ハ、モ、コソ、ナラ、デモ、サエ、である。そして取り立ての下位類（？）として、「単純、追加・譲歩・連立、特別、条件、暗示、予想外」などが例をあげて示されている。

取立てを分けて次の二種とする。松下の用語との対応は次のようになる。

（松下）

取立て｛提題／評価｝　　提示｛題目／特提｝

3. 取立て助詞の本質に関するいくつかの問題

3.1. 取立て助詞の構文的位置づけ

本稿は、文が、客体界を反映する（ことが話し手によって意図されている）

「コト」と、それを素材として話し手が何らかの主体的立場をとることを話し相手に示そうとする「ムード」から成る、という、伝統的ともいえる構文観から出発している。そのムードと規定するものが、日本語で実際にどういう構文要素によって表わされるか、その内部構造はどうなっているか、それによって表わされる意味特徴を記述するにはどうすればよいか、などを考えるのがこのシリーズの目的であり、今回はその (3) である。

ムードの中にどのような類型が考えられるかの包括的な体系化は今後のことであるが、本稿に先立つ (1) では、「ある事態についての真偽、あるいはその確実さについての情報を相手に提供しようとする」文を「報道」のムードをもつものとし、そのうち、不確実な事態についてさまざまな情報をもとに推測する表現を「概言的（報道）の表現」とし、それを表わす助動詞をとりあげた。(2) では、事実としては既に聞き手の知識にある事態の、由来や意義や背景、事情などを「説明」する種類の助動詞を観察した。

以上はいずれも文の中核をなすコトをひとまず描き、その上でそれらに話し手の主観を加えるものであるが、本稿でとりあげたのは、コトを描くに当って、あるいは描きながらその途中で、話し手が自分の顔を出す、そういう機能を担った助詞の問題である。

話しを始めるに先立って、あるいは話しの途中で、話し手が顔を出すものといえば、まず「オイ」とか「ハイ」「アノネ」のような感動詞の類と、「ソレカラネ、戦争ガ始マッテネ、」のような間投助詞の類が思い浮かぶ。これらは、先にムードを「対人的」と「対事的」に分けた中の「対人的」ムードである。これに対し、本稿の対象とする助詞の担うムードは、コトの中のある部分を際立たせる役割をもつものであるから、(1) や (2) の場合と同じく、「対事的」ムードの一つと考えるべきであろう。もちろん、コトに向けられたムードといっても、そこに表わされる話し手の主観、見方を相手に伝え、時には押しつけることによって、結局は相手に何らかの影響を及ぼそうとする意図にでることが多い。その意味ではすべてのムードは話し相手に向けられたものである。ここで、対事、対人と分けるのは、その小分けにすぎない。

なお、本稿では、松下 (1930) にならって、山田以来係助詞と副助詞とに分けられて、格助詞その他の助詞と並立的に立てられていたものを一括して一種とし、その中に二つの小類を認めたが、これはもちろん、係と副の相似の方を、相異よりも大きく見ることに基づく。

以上をいったん整理すると次のようになる。

						現れる位置		
					される品詞の職能を託	文前	文頭・中	文末
文	コト				(格助詞)	×	○	×
	ムード	対事的	事態の説明	助動詞		×	×	○
			報道	確言	活用語尾(現・過)	×	×	○
				概言	助動詞	×	×	○
			取立て	提題	取立助詞	×	○	×
				評価	取立助詞	×	○	○
			……					
			……					
		対人的			感動詞	○	×	×
					間投助詞	×	○	×
					終助詞	×	×	○

次に、取立て助詞に共通して見られる統語的、表現機能的特徴をいくつか取り上げ、その中にまたいくつかの小類型があることを見ていくことにするが、その前に、断るまでもないかもしれないが、本稿の関心が、先の宮地 (1952) と基本的には同じく、機能の特徴づけと、どういう助詞がそのように使われるかの観察にあることを記しておきたい。外形的には同じ助詞でも、違った機能の類型に現れるものは、違った種類の助詞としなければならない。たとえば、先の「3時マデ待ッタ。」や、「東京マデ行ク。」のマデは、コトの叙述に寄与するものであるから格助詞であるが、「妻マデ彼ニソムイタ。」「イナゴヤ芋ノ蔓マデ食ベタ。」などのマデは取立て助詞である。それの付く名詞が後の述語に対して一定の格に立っており、それを包んでそれを際立たせる働きをしているからである。

3.2. 取立て助詞の現れる位置

この種の助詞の際立った特徴は、まず、それの付く語の種類が多様だということであろう。文を構成する要素の継ぎ目のあちこちに付く。文中の補語（名詞に格助詞が付いたもの）と共起する場合と、副詞や用言、特に複合的な述語の中に割り込んでくる場合、文末に来る場合などに分けて見てみよう。

補語との共起は、山田（1908）で、格、副、係の相互承接の問題として考察に先鞭がつけられて以来、副助詞の論説には必ず言及されているので、ここでは簡単な一般化と、いくつかの個別的な問題を記しておきたい。

まず、主格の「ガ」と共起するときであるが、この場合は、取立て助詞が、「ガ」のあとに付くことは決してない。（以下、ときに格助詞一般をK、取立て助詞をT、名詞をNと略記する。）

N-T-ガ、となるかどうかは、その取立て助詞による。なり得るのは、ダケ、ナド、ナンカ、グライ、マデ、バカリ、コソ、スラである。なり得ないのは、ハ、ダッテ、ナンテ、シカ。中間的なのがモ、サエである。なり得る場合も、ガは落ちて、TだけがNに付いている場合が多い。落ちても、そのNとあとの述語との格関係は分かる。これはあとで見るヲの場合も同じである。三上章は、助詞ハの機能の中に、格助詞を「代行」する働きのあることを指摘したが、このことは、すべての取立て助詞に共通する点である。

次に、N-T-ガ、N-T-ϕ の実例をいくつかあげておく。

（7）「半左衛門の死体だけが確認され、源宗寺へ葬られた。（山本周五郎）

（8）両方が少しも傷つかない別れなどこの世にありはしないのだ。（井上靖）

（9）種はもとよりのこと、属や科のような単位でさえが、同位社会というものによって具体化され……（今西錦司）

(10) あたしやさしい男なんて嫌いよ。（山本周五郎）

「Nヲ」の場合は、少し違った様子が見られる。まず、ハ以外のTで上にあげたものはすべて「N ヲ-T」となり得る。「N-T-ヲ」は、ガの場合とほとんど同じく、先のダケ以下のグループについて可能である。ヲが落ちることが多いのも、ガの場合と同様である。

(11) ひたすら反省ばかりしている。

(12) 著名なものばかりをあなたに云っただけです。（松本清張）

(13) いかなる小さい音をも立てずに……（井上靖）

(14) 自負をさえ感じた。

(15) 鼈糸をかけたままで、自分で器用に着つけて、帯までしめて出てくるのだ。（有吉佐和子）

(16) 悪いことでもしたような心の咎めを……

次に、「ニ、ヘ、デ、ト、ヨリ、カラ」などの格助詞の場合を見てみる。すべてのTがこれらの格助詞のあとへは付き得るが、これらの前へ付き得るのは、ダケ、ナド、ナンカ、グライ、マデ、バカリ、である。（これらのTを T_2 とする。）ハ、モ、コソ、スラ、ダッテ、ナンテ、シカ、サエ、デモ、はこれらの格助詞の前へは現れ得ない。（これらを T_1 とする。）つまり、格助詞の前にも後にも現れるのは T_2 だけということである。

山田（1908）は、「格助詞の上にあるものは其の体言の用言に対する意義上の関係のみを示し、格助詞の下にあるものは体言の用言に対する資格上の意義を修飾す。」と説明している。理屈ではたしかにそうであろうが、実際に区別があまり感じられない。山田の、「水のみを飲む」といへば飲みたる物質が唯水に限られたることを示し、「水をのみ飲む」といふ時は水を飲むのみにして他の動作をなさぬ意」となる、という例による説明もあまり説得的でない。宮地（1957）は、

a.　あなたをだけ頼りにしてるんですよ。

b.　あなただけを頼りにしてるんですよ。

は、「言語現象に格別の反省を持ったことのない人に」尋ねても「違いはわからない」と答えるほど類似しているが、一般的な、体言に近いほど体言を限定することが強く、体言から離れて用言に近づくほど用言へのかかり方が強くなる、という原則は、厳密にいえばaとbとの違いにもあてはまる、と述べているが、この方が説得的である。しかし、格助詞によって、どちらかが不自然であったり、T-Kとなるか、K-Tとなるかで意味がかなり違ってくる場合もあるようだ。たとえば、

(17) a.　キムチデダケ御飯ヲ食ベル。

b.　キムチダケデ御飯ヲ食ベル。

上の違いを「言語現象に格別の反省をもったことのない」人に尋ねると、はっきり意味が違うと答える人が多かった。aのほうは、キムチを与えなければその人はご飯をたべない、という意味だというのである。「N-K-ダケ」は、「N-シカ‥‥ナイ」と言い換えられるが、「N-ダケ-K」はそうではない。

マデは、Kのあとに現れるのがふつうであるものの一つである。

(18) a.　子供たちにまで唄われている。

b. ?子供たちまでに唄われている。

(19) a. 老人の妾にまでなる気はなかった。

b. ?老人の妾までになる気はなかった。

この点の観察はもっと広範囲に吟味しなければならない今後のこととして、次に実例を少し並べておく。

(20) ひたすらその思いの中にだけ浸っていた。

(21) 左差しにばかりこだわった。

(22) あれがなにを考えているかということにさえ、いちども気をつかった覚えがない。 (周五郎)

(23) まるで野中の一つ家にでも住んでいるような…… (周五郎)

(24) くつがえす方ばかりに作用した。

こうして見てくると、はじめにあげた特徴を共有する取立て助詞の中に、ほぼ二つのグループがあることがわかる。

一つは、上に T_1 としたもので、これらはいろいろな補語のあとに付いてそれを取り立て働きをもつが、主な職能は、色々な格にある名詞句を取りあげ、それを文全体の題目とすることであると思われる。T_2 のほうは、文中の補語を、補語として、あるいはその中心の名詞を、取り出して、何らかと対比させる役割のみを託されている。

T_1 のグループ、すなわち佐久間鼎によって提題の助詞と呼ばれた「ハ」、およびそれに準じた働きをもつもの、モ、コソ、スラ、ダッテ、ナンテ、サエ、シカ、を取立て助詞のうちの「提題」の助詞とする。

T_2 のグループ、ダケ、ナド、ナンカ、グライ、マデ、バカリ、を「評価」の取立て助詞と呼ぶことにする。

「デモ」は、サエと同じく中間的であるが、一応「提題」の方に入れる。なお、国研 (1951) は、係助詞として「トハ」を入れているが、これは、上のいろいろなテストの中でひとり特異なふるまいを示す。意味的に提題を表わすには違いないので一応このグループに入れるが、その構文的な特異性は注意されねばならない。

複合的な用言の内部に取立て助詞が割り込む場合 (「泣イテバカリイル」「行キサエスレバ」「言イハシマス」)、副詞に付く場合は、紙面の都合上割愛し、次に用言のあとに取立て助詞が付く場合につき簡単に記しておきたい。

「評価」の取立て助詞の中には、ダケダ、バカリダ、マデダ、のように、文

末で「ダ」と結びついて、ムードの助動詞のように、先行するコト全体を他の何かと対比する働きをもつものがある。

バカリは、「十個バカリ包ンデクレ」のように、数量表現に付くときと、「漫画バカリ読ンデイル」のようにふつうの名詞に付くときとですでに意味が違うが、

(25) 今着イタバカリダ。

のように文末助動詞化した場合も、意味は別に記述する必要がある。

このように、取立て助詞が、ダと一体化して文末で助動詞のように働く場合についてはまだ多くの観察が必要である。

たとえば、ダケにはこの用法があるが、シカにはない。両者は前にも見たように、「それ以上を期待していたのに、それ以上来なかった」という含みをもつ点でよく似ているように見える。が、シカは、その文をとりまく文脈と関わっている点で、ダケよりいわば一段上の構文的機能をもっている。この両者の違いには、後にも例をあげるように、ダケダのような文末用法がシカにはないことも関連づけて考えてみる必要がありそうである。この種の例を少しあげる。

(26)……片隅に坐って他の人々の稽古を見るばかりで、自分ではいつかな木剣を執ろうとしない。(中略)

「いやまだとても」

答えるだけで立とうとしなかった。いちどならず宗在が促しても、やはりおなじように辞退するばかりだった。(山本周五郎)

(27) たびたび八木千久馬や、以前の同僚たちが訪ねてきたが、かれらにも後日を約しただけで、会わなかった。

上のように、「……ダケダ」「……バカリダ」は、「……ノダ」と似たところがあるように思われる。これらで終る文の直接構成要素は、「……」の部分、すなわちコトを表わす部分と、これら「T＋ダ」の二つである。その「T＋ダ」は、その文の外にある何らかの事柄に対応している。そのコト全体を他の何らかの（普通に期待される）事態と対比させているのである。

次に、このような特徴をもつ取立て助詞がどういう意味を表わすために使われるのか、という面から見ることにする。

3.3. 取立て助詞の表現機能

前節で見たように、取立て助詞は、文のいろいろな場所で、いろいろな種類の構成要素に付くが、それによって話し手が何を表わそうとしているかという面から見ると、それは、それらの付く要素を「際立たせる」という点を共通の特徴としてもつ。

既に言い及んだとおり、「際立たせる」ということは、際立たないなにものかと「対比する」ことである。たとえば、「太郎ダケガ来タ」といえば、「太郎のほかに来ることが予想されていた（あるいは来る可能性があった）ほかの誰か」と太郎が対比され、文としては、「太郎以外は来なかった」という「含み」をもつことになる。

(28) a. 本ヲ読ンデバカリイル。

は、「本ヲ読ンデイル」という、コトについての情報と、ほかの（期待される、あるいは可能性がふつうに考えられる）こと、

(29) b. 運動ヲスル

c. 散歩ニ出カケル。

d. 何カモノヲ書ク。

などといったことと対比され、「そのようなほかのことをすこしもしないで、本をよんでいる」という、コトに対する話し手の評価についての情報とを共に相手に伝えるのである。

どの部分が何と対比されているのかは、その付く語によってわかる場合もあるが、文脈あるいは状況がわからなければわからない場合も多い。また、その社会の価値観とか習慣とか制度とかについての知識がなければ完全にはわからないということも珍しくない。

付く語によって対比がすぐわかるのは、たとえば数量表現に付く場合である。

(30) 1万円シカ持ッテイナイ。

(31) 1万円モ持ッテイル。

などでは、それぞれ「一万円以上、当然もっていていい金額のお金」「一万円よりかなり少ない額のお金」と対比されていることは、日本語を解する者なら誰にでもわかる。しかし、「太郎ダケガ来タ」のような文では、対比されているのが誰なのかは、状況を知らぬものにはわからない。ただ、「太郎以外の誰か（一人またはそれ以上）が来ること」を話し手が期待しており、その気持で

「太郎ガ来タ」という事実を見ている、ということだけはわかる。これが「〜ダケ」の、セマンティックな範囲であり、実際に誰が期待されながら来なかったのかは、プラグマティックな問題である。

先に触れたように、「マデ」が「3時」とか「東京」とか、空間・時間の延長線上の点として捉えられる名詞に付くときは、聞き手はただ、ある動作や状態がある期間、あるいは空間、継続して、それが終結する点を示していると了解するだけだが、先の「芋ノ蔓マデ」のような場合は、社会通念としての順位づけ、ランキング、についての知識がなければその意味を充分に理解できない。

(32) インド人もびっくり

がカレー粉の宣伝になり得るのは、インド人とカレーについての（日本人一般の）常識，つまりプラグマティックな条件があってのことである。それがなければ、この文はただ、「誰かがびっくりした、インド人もびっくりした」という、セマンティックな情報しか伝え得ない。

時枝は、この種の助詞が「期待、評価、満足」を表現する、と述べたが、それもふつうは、話し手が聞き手の、状況ないし社会通念に依存し、それが当っているときに生まれる「意味」である。

取り立てが、単なる対比、つまり知的意味における対比であるが、情緒的なものを含んだ「評価」であるのかは、このように、大きく聞き手の側の、実在界についての知識に依存している。その「対比」が、対比の色を次第に薄めていくと、「題目提示」となる。「ハ」は、よく「題目」と「対比」を表わすといわれるが、その違いは、一部は構文自体に依存し、一部は文脈、状況、社会通念にも依存している。

関連文献

国立国語研究所　1951『現代語の助詞助動詞』
佐久間　鼎　1952『現代日本語法の研究』(恒星社厚生閣)
時枝　誠記　1950『日本文法　口語篇』(岩波)
橋本　進吉　1950『国語法要説』(『著作集』II)
松下大三郎　1930『標準日本口語法』(再刊 1961　白帝社)
松村　明・編　1969『古典語現代語助詞助動詞詳説』(学燈社)
宮地　裕　1952「副助詞小攷——主として準体助詞との関連に於いて」『国語国文』21巻8号
山田　孝雄　1908『日本文法論』(宝文館)
　　1922『日本口語法講義』(宝文館)